

言語の指示機能

——ラングの言語学批判——

牧 内 勝

0.0. 「言語 (langue) には差異 (différence) と対立 (opposition) しかない；言語は形態 (forme) であって実体 (substance) ではない」——これがソシュールによるラングの言語学の主旨と言って差し支えなからう。

しかし、この断言はどこまで言語現象の真実をとらえているであろうか。我々は以下で、ラングの言語学には欠落している、言語の指示機能について、様々な角度から検討し、ソシュール言語観の、また、これに基本的なところで一致している変形生成文法理論の、根源的な欠陥を指摘してみたいと思う。

1.0. ソシュールは、言語を一葉の紙片に例え、表としての「思想」と、裏としての「音」とが密接に一体化しているため、一方だけを他方から切り離すわけにはいかない、と述べたあとで次のように断言している。

「したがって、言語学の作業場は、二つの秩序の要素が結合する境界地域である；この結合が生み出すものは、形態であって、実体ではない」⁽¹⁾

ここで言われている「二つの秩序」とは、「思想」と「音」とを指すが、それはまた、それぞれ「記号内容」(signifié) と「記号表現」(signifiant) とを言い換えたものである。「記号内容」と「記号表現」の両者の結合した総体が「記号」(signe) である。したがってまた、「言語」(langue) は記号である。

言語の指示機能

1.1. ソシュールは、記号としての言語にみられる特質の一つとして、その「恣意性」(arbitraire)を繰り返し指摘しているが、それは、「記号内容」(「思想」)と「記号表現」(「音」)との結合の仕方の性格として言及したものである。例えば、「妹」という記号内容は、いかなる内的必然性によっても、“s-ö-r”という記号表現と結合されていない。このような、両者の結合の「無縁性」(im-motivé)は、言語間の差異に注目することによってさらに明確な証拠を与えられる。同一の記号内容「牡牛」は、フランスでは“b-ö-f”(boeuf)、隣りのドイツでは“o-k-s”(Ochs)という全く異なった記号表現が用いられているのである。

ソシュールの意図する言語の恣意性に対して初めて疑問を投げかけたのは、我々の知る限りではバンヴェニスト(Benveniste, Émile)である。彼の批判の骨子を列挙すると、(1) “b-ö-f”と“o-k-s”との差異に言及する場合、必ず両者が同一の「実在」(reality)に対して適用されている。これは、言語は実体ではなく形態である、という定義と矛盾する；(2) 言語の恣意性は、記号内容と記号表現との結合の仕方にではなく、「記号」と「実在」(「実体」)との関係にこそ存在する；(3) 記号内容と記号表現との結合の仕方は、むしろ「必然的」(necessary)である。⁽²⁾

バンヴェニストが指摘した以上の三点につき、以下で検討してみよう。

1.2. ソシュールは、言語の恣意性の証拠として、同一の「思想」(「記号内容」)に対して、似ても似つかぬ幾多の「音」(「記号表現」)が存在する事実を挙げているが、まず、「同一の思想」の「同一性」が問題となる。「思想」は、ソシュールにとって、「概念」(concepts)に等しい。「概念」は、「実在」とは異なり、内在的・心理的な要素であって、「概念」の内実は、個人間や民族間において、「普遍的」な面と、「特殊的」な面との両面から成立している。“b-ö-f”と“o-k-s”が、「同一の思想(概念)」をもつと言っても、厳密な意味では、普遍的な内実とともに特殊な内実(あとで「暗示的意味」として論ずる)をも含んでいる。したがって、問題となっている「同一性」は、概念としての「記号内容」

に適用されるのは誤りであり、むしろ具体的・外在的な「実在」に適用されるべきである、というバンヴェニストの指摘は正鵠を得ている。

“b-ö-f”と“o-k-s”の「普遍的」な概念は勿論のこと、「特殊的」な概念であっても「実在」にもとづいて形成されているのであるから、概念と実在とは密接な関係を保っているのものであって、前者を後者から切断して孤立させることはできない。(ただし、ここでは、実在として存在しない、「名目」のみの記号は問題としない)。ソシュールが、実在には触れることなく、概念(記号内容)と音(記号表現)との関係のみに言及しているのは、一種の「抽象」であり事実と反している。したがって、言語は、記号間の諸関係としての「形態」のみから成立していて、「実体」(「実在」)とは縁が無い、とみるのは誤りで、むしろ実体とは深い密接な関係を保持している、と言わなければならない。

1.3. バンヴェニストが言語の恣意性を、記号内容と記号表現との関係にではなく、「記号」と「実在」(「実体」)との関係に認めていることは、前節で述べた言語事実と矛盾しない。すなわち、前節では、とくに「記号内容」(「概念」)と「実在」との関係が密接である点を指摘したが、このことは決して「実在」が内的必然性をもって「記号」(「記号内容」ではない。)と結合していることを意味してはいない。それどころか、正に「音」と「概念」との総体である「記号」と、「実在」との関係こそ無縁的・恣意的である。バンヴェニストの適確な表現を用いるなら、「恣意的なのは、或る一つの記号が、しかも他の記号は全く除外されてその記号だけが、実在の或る一つの要素に、しかも他の要素は全く除外されてその要素だけに、適用されている点にある。」⁽³⁾ すなわち、“b-ö-f”(または、“o-k-s”)という「音」と「概念」の総体としての「記号」と、「実在」との選択関係が恣意的なのであって、記号内部の「音」と「概念」との関係ではない。

以上のように「記号」と「実在」との間に「恣意性」を認めることは、次節で述べる通り「音」と「概念」との間に「必然性」を認めることと表裏一体をなし

ている。

1.4. バンヴェニストによる三番目の批判点は、一番目、二番目の批判点を含めた全体の中で最も重要で、かつ決定的な意味をもっている。それは、「音」と「概念」（「記号表現」と「記号内容」）との関係に、ソシュールとは全く反対に、必然性を認めたことである。その根拠は、言語使用者の意識の現実性に由来する。すなわち、

「概念（記号内容）*boeuf* は、音連鎖（記号表現）*böf* と、私の意識の中でいや応なしに同一（*identical*）である。一体全体、それ以外であり得ようか。両者とも一緒に、私の心に刻印されていて、どんな場合でも一緒に生起する。両者の間には、このように密な共生（*symbiosis*）が存在するので、*boeuf* という概念は、聴覚映像 *böf* の化身（*soul*）のようなものである。心の中には、空疎な形態は存在しないし、名前のない概念も存在しない。」⁽⁴⁾

概念を伴わない音は、ただの音であって言語音ではないし、音を伴わない概念というものも存在しない。幼少の子供の発音は、上手にできても概念が伴っていないければ、内容を理解できた大人にとっては言語であっても、その子供にとってはただの音にすぎない。また、自分の言いたいことはわかっているのだが発音できない場合、音を忘れてしまったというよりは、概念自体がまだ判然と意識されていないとみるべきであろう。要するに、話す・聞く「主体」の内面の意識としてみる限り、音（記号表現）と概念（記号内容）とは「不可分」であって、その意味で「必然的」である。決して「恣意的」ではない。ここにおいて、言語を研究対象の「客体」としてみる立場と、「主体の行為」としてみる立場との差異が歴然として現われてくる。

以上のように、記号表現と記号内容とは不可分で必然的な関係をもっている、とみなす立場をとるならば、以下に引用するソシュールの言明は、カッコ内の用

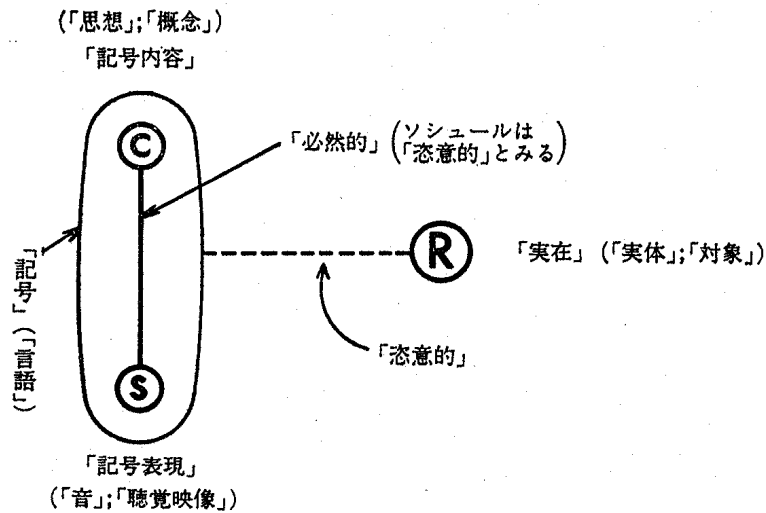
言語の指示機能

語をもって修正されなければならない。

「それが表わす観念（実在）との関係から言えば、記号表現（記号）は自由に選択されたようにみえたとすれば、逆に、それを使用する言語社会との関係から言えば、記号表現（記号）は自由ではなく、押しつけられている。社会大衆は、全く相談を受けることはないし、その言語（言語社会）によって選択された記号表現（記号）は、他のものと交替できない。」⁽⁵⁾

1.5. 前節までの要点を図解してみれば、(1) のようになろう。

(1)



2.0. さて、ここで我々は、「意義」(sense) と「指示」(reference) とを区別しておかねばならない。この区別は、そもそもフレーゲ (Frege, Gottlob) によるものであるが、以下で前節の図解と照合させながら彼の意図を明らかにしてみたい。

2.1. まず、記号には「観念」(idea) があるが、それは「自分が所有し

言語の指示機能

たことのあるもろもろの感覚印象、および、自分が遂行したことのあるもろもろの内的・外的行為などの記憶から生まれる内的イメージである。』⁽⁶⁾ また、観念には「感情」(feeling) が多分に含まれていて、「主観的」なものである。

これに対し、記号の「意義」は、多数の人々に共有されていて「客観的」なものである。例えば、“Bucephalus” (アレキサンダー大王が遠征に用いた軍馬) という名前に対して、画家、騎士、動物学者などは、それぞれ異なった「観念」を結びつけるだろうが、反面、誰しもが共通の「意義」を見い出すであろう。(さもなければ、コミュニケーションも、思想の継承も不可能になる)。

しかし、記号の「意義」は「対象」(object) そのものではない。“Bucephalus” の意義は、決して実在の軍馬そのものではない。「意義」には「提示の仕方」(the mode of presentation) が含まれているのであって、“Bucephalus” のことを“Alexander's horse” と言えば、同一の「対象」を異なる「意義」をもつ二つの記号で提示したことになる。「対象」自体は「指示」(reference) と呼ばれている(我々が「実在」と呼ぶもの)。

以上を要約すれば、「個有名詞(単語、記号、記号連結、表現)は、その意義を表現し(express)、その指示を明示する(stand for, designate)。』⁽⁷⁾ ということになる。また、「意義」、「指示」、「観念」の関係を、比喻を用いて明快にすることができる。すなわち、望遠鏡による月面観察において、観察の対象である「月」自体は「指示」であり、観察の仲介をする、望遠鏡内部のレンズに投影される実像と観察者の網膜像とは、それぞれ「意義」と「観念」(又は「経験」とである)。

2.2. 「個有名詞」という「単語」の単位から、「文」の単位に拡大した場合、どうなるであろう。まず、「叙述文」全体には「思想」(thought) が含まれている。この「思想」は「主語」と「述語」から構成されていて、特定の「意義」をもつ。この「意義」は、単語の場合と同じように、多数の人々に共有されるもので「客観的」である。

言語の指示機能

では、「文」の「指示」とは何か。それは「真理値」(truth value)であり、しかもこの真理値が追求される場合に限り、文は「指示」をもつ。「真理値」とは、具体的には、文が「真」であるか「偽」であるか、いずれかの状況を指すことを意味している。

文の指示は「真理値」である、とフレーゲが主張するとき、その対象が主に科学的な文に限定されてしまっている。文学作品としての詩や小説は、「意義」と、意義によって喚起される「イメージ」や「感情」のみで構成されているので、「指示」は問題とならないと考えられている。「指示」をもたない記号は、「表象」(representation)と呼ばれているので、詩や小説など文学作品は、表象の世界のみを問題としていることになる。⁽⁸⁾このような限定を打破して、隠喩を中核とした文学作品にも「指示機能」のあることを積極的に認めているのは、リクール (Ricoeur, Paul) である。⁽⁹⁾

2.3. フレーゲによって区別された四つの概念、すなわち、「観念」、「意義」、「思想」および「指示」(又は「対象」)を、(1)で示した図と照合させてみよう。

まず「観念」、「意義」、および「思想」は、いずれも「記号内容」(「概念」)に含まれ、その下位区分をなしているとみてよい。その中で「観念」は、主観性の強い「概念」または「暗示的意味」(connotation)のことであり、「意義」は、客観性をもつ「概念」であり、とくに「文の意義」は「思想」と呼ばれる。

次に、「指示」(又は、「対象」)は、まぎれもなく「実在」のことである。この「指示」は、あくまでも「意義」とは別個の独立した存在である。異なった「意義」をもつ二つの記号が、同一の「指示」をもつ例はすでにみた(他の例として、「明けの明星」と「宵の明星」;「アレキサンダーの師」と「プラトンの弟子」など)。また、「意義」をもつ記号であっても、「指示」をもたない例もある(「一角獣」とか「宇宙の果て」などは経験上「指示」をもたない)。以上の例からもわかる通り、「意義」が「指示」と一対一の対応をなしていない事実が、両者の独立

性を物語っている。

2.4. さて、翻ってソシュールが言語学の十全な対象とみなした「言語」(langue)の性格を、(1)の図を参照しながら考察してみよう。

ソシュールにとって「記号」としての「言語」(以下「ラング」と呼ぶ)を構成しているのは、「差異」(différence)と「対立」(opposition)でしかない。⁽¹⁰⁾「差異」は、「音」と「概念」との両者に適用され、音の「示差的特徴」は概念の差異と、概念の「示差的特徴」は音の差異と、それぞれ対応する。この両者の一連の差異の結合こそが、言語体系の内実である。「言語体系は、一連の音の差異が、一連の観念の差異と結合したものである。」⁽¹¹⁾次に、「対立」は、音と概念の総体としての「記号」同志に適用される。「それぞれ一個の記号内容と、一個の記号表現から成る二個の記号は、差異を示すものではなく、ただ区別を示している (distinct) だけである。二個の記号の間には、対立しかない。」⁽¹²⁾この対立によってのみ、各記号は個有の「価値」(valeur)を得る。「同一の言語内では、隣接観念を示す語はすべて、相互に制限し合う；こわがる (redouter), おそれる (craindre), 恐れを抱く (avoir peur) のような同義語は、それらの対立によってのみ個有の価値を得る。」⁽¹³⁾

「差異」と「対立」からのみ構成されるラングの体系は、個々の記号の内部関係と、記号間の外部関係の論議に終始する。(1)の図にしたがえば、左側の「記号」の内部構造と、この「記号」と他の別個の「記号」との外部構造だけがラングのすべてである。「記号」の領域を「超越」したところで得られる、「実在」と「記号」との関係、「実在」そのものの内実、などは捨象されてしまっている。別言すれば、「記号」が「実在」を指示する「指示機能」、または「指示作用」は、切り捨てられてしまっている。その根本原因は、「ラング」を「記号」と全く同じように科学研究の「対象」とし、「客体」とみなしているところにある。

我々は以下で、言語活動を、「客体化」された「ラング」としてではなく「主体的な行為(又は、出来事)」の「パロール」として注目するとき、それまで陰然として不明であった「指示機能」が確固として存在する事実を知るであろう。

具体的には、英語および日本語の「代名詞」、とくに「人称代名詞」のもつ指示機能を考察してみたい。⁽¹⁴⁾

3.0. まず、英語の人称代名詞“*I*”は、一方において、「音」の[ai]をもつが、他方において、対応する「概念」をもっているだろうか。辞典の定義によれば、「概念」とは「思考や判断によってつくられるもので、はっきり限定された一般的な表象である。たとえば、建造物という概念は、家・小屋・アパート……などの個々の表象から類似なもの、共通するもの、その本質をなしているものが抽象されてつくられたものである。」⁽¹⁵⁾今この定義を“*I*”に適用してみても、例えば、思い浮べることのできる個人個人の「表象」から「類似・共通するもの」、「本質をなしているもの」を抽象しても、“*I*”の概念は生まれてこない。ただ、“*man*”, “*boy*”, “*woman*”, “*girl*”といった概念は容易に生まれるのだが。“*I*”という音と同時に、あるいは、この音に対応して「必然的」に、ある「概念」を想起することはできない。この意味で“*I*”は、音だけをもつ「空疎な」言語形式だと言わなくてはならない。

それでは“*I*”は、ある「特定の個人」が自分を指すときに用いる言語形式だろうか。もしそうだとしたら、この“*I*”は、無差別に誰もが自分を指すときに用いることができるという事実と矛盾してしまう。

こうして、“*I*”は「概念」をもつわけでもなく、ある「特定の個人」を指すわけでもない、特殊な性格を担っている。

実は、“*I*”のもつ本来の「意義」は、これを「記号」とみなしてその内部構造（「差異」）や外部構造（「対立」）を調べたところで判明するものではない。その意義は、個々の具体的な、実際上の「発話行為」の中で初めてとらえられる。（「書記行為」においても本質的には同様である。）“*I*”は、一回一回の「発話行為」の中で、話者が発話の主体である自分を「指示」するために用い、同時に、その“*I*”の含まれる発話全体に対して、発話の主体としての「視点」（又は、「主体性」⁽¹⁶⁾）を確立する。このように“*I*”は、「ラング」として（ただの「記

言語の指示機能

号」として)ではなく、「パロール」として(個々の「実現例」の中で)考察されるとき、それまで「空疎」であった形式が、話者の「自己指示・視点確立」という機能を発揮することによって「充足」され、初めて意義をもつことになる。そして「指示機能」の役割を終えると同時に、また「空疎」な言語形式に戻ってしまうのである。“I”は、まことに特異な性格を担った形式と言わなければならない。

3.1. “I”と本質的には全く同じ性格をもった人称代名詞が“you”である。この言語形式も、ラングとしてみた場合には「空疎」であるにもかかわらず、ひとたび個々の「実現例」の中で、パロールとしてみると「指示機能」を發揮するのである。ただ“you”の場合は、“I”が発話の主体を指示するのに対して、その発話が向けられる「応対者」を「指示」する。

更に興味深いことは、“I”と“you”の間には「互換性」があって、発話の交替とともに自動的に交換して用いられる点である。また、“I”は常に“you”を予想し、“you”は常に“I”を予想し、両者は不分離なペアを形成しているので、両者には「相補性」もある。そして、「実現例」の「状況」の中では、“I”と“you”以外の「中間者」も「第三者」も存在しないので、両者は「両極性」を担っている。(複数の“we”, “you”の場合や、一方だけが複数の場合も、基本的には同じである。)“I”と“you”の両言語形式の間に見い出される、以上の「互換性」、「相補性」、「両極性」などの特性は、あくまでも個々の実現例の中で現われるものである点を強調しておきたい。

3.2. “he/she/it”などいわゆる「第三人称」の代名詞も、ある「概念」をもっているわけではないし、「特定の個人」を指しているわけでもない、という点では“I”, “you”と同じ性格をもっているが、前節で述べたような三つの特性のいずれも備えてはいない、という点では“I”, “you”とは全く異なった言語形式である。発話の現場に居合わせない、という意味で物理的に遠距離の

言語の指示機能

者を指示するだけでなく、精神的にも「疎遠」であることを指示する場合がある。ドアを叩く来客に向かって“Who is it?”と言ったり、独白の中では目の前の軽蔑すべき人物を“he/she”で呼ぶ、などの例をあげることができる。

4.0. 今まで考察してきた英語の代名詞に関する基本原理は、そのまま日本語の代名詞にも適用することができる。すなわち、標準用語の「私」は個々の実現例の中で「指示機能」を発揮し、「自己指示・視点確立」の役目を果し、同じく標準用語の「あなた」も、具体的な個々の発話行為の中で、発話の向けられる「応対者」を指示する。更に、「私」と「あなた」との間にも、英語の場合と同じように、「互換性・相補性・両極性」が成立する。

しかし日本語の人称代名詞は、英語の場合と異なり、複雑多岐にわたる。その理由はまず何よりも、各人称に属する「名称」の数が非常に多いことからきている。いま、一人称、二人称の名称をとりあげてみると、日常語としては少なくとも下記のもがよく用いられる。これらの名称にみられる特徴は、まず第一に、一方の特定の名称が使用される（実現される）とき、常にこれに対応する特定の名称が予想されることである。両人称の名称間には、密接な「対応関係」が存在するのである。(2)のペアは、「適切」な対応関係をつくっているが、(3)のペアは不適切である。

- (2) 「わたくし」——「あなた」
「わたし」——「あんた」
「ぼく」——「きみ」
「おれ」——「おまえ」、「きさま」

- (3) *「わたくし」——「きさま」
*「おれ」——「あなた」
*「ぼく」——「おまえ」

言語の指示機能

第二の特徴は、第一の「対応性」と深い関係をもっているのであるが、一人称の名称選択は「発話の状況」次第で変化する。もっと具体的には、発話の向けられる「相手」（「応対者」）次第で変化する、という事実である。これを一人称使用に関する「相対性」と呼ぶことができよう。二人称の名称選択が、一人称の名称選択に先行し、後者の選択権をもっているのである。「きみ」がまず選ばれたので（それが顕現的であろうと潜在的であろうと）「ぼく」が選ばれるのであって、その逆ではない、ということである。次に、どの二人称名称が選択されるかは、「公的・私的」にわたる「人間関係」に基づいている。「公的」な人間関係には、話者と相手の「性別・年齢・社会的地位」などが含まれ、「私的」な人間関係には、相手に対する話者の「意図・態度」（軽蔑・尊敬など）が含まれている。例えば、ある人が相手を「きさま」と呼んだとする。その話者は、公的には、社会的地位には関係なくある年齢（たとえば小学生）以上の男性であり、私的には、相手に対して軽蔑の念をもっている人物であることが推察できる。またこの場合、相手は、話者の軽蔑の対象でありさえすれば、誰でもよい。「発話の状況」の中には、話者と相手との人間関係だけでなく、公的な場か、私的な場か、という「場所」の要因も含まれている。例えば、「きさま」という名称は、私的な場では用いられても、公的な場では抑制される傾向をもっている。

以上みてきた通り、日本語の一・二人称の名称には、「対応性」、「相対性」がみられるだけでなく、「公的・私的人間関係」が見事に反映されている。

4.1. 日本語には、前節でとりあげた人称代名詞とは別種の人称代名詞が存在する。話者である「自分」のことを、「発話の状況」次第で、「先生」と呼んだり、「お父さん」、あるいは「おじさん」などと呼ぶ。これらの名称は、発話の向けられる「相手」を指示する場合にも用いられる。この種の名称にも、前節でみた「対応性」と「相対性」とが含まれている。例えば、「先生」対「生徒」または「学生」であり（対応性）、後者の選択が前者を決定する（相対性）。前節の名称と異なっている点は、「自分」または「相手」を、「職業」（例えば「先生」）、

言語の指示機能

「家族関係」（「お父さん」）、「社会的関係」（家族以外に対する「おじさん」）など、広い意味の「社会的な役割」に基づいた名称である、ということである。すなわち、「先生である私（あなた）」、「お父さんである私（あなた）」、「おじさんである私（あなた）」という表現から、その特定の発話状況では不要な（あるいは無関係な）前節でとりあげた名称部分（「私」、「あなた」など）を切り捨て、ただ「役割名称」の部分だけを、その特定の発話状況には「適切」であると考え残して用いた、とみることができる。この「社会的役割」という要因も、前節で述べた「公的な人間関係」の一部、しかも重要な一部、と考えることができる。⁽¹⁷⁾

4.2. 今迄の考察によって、日本語の人称代名詞も、英語と同様に、ただの「記号」としては、「概念」をもっているわけでも、「特定の個人」を指しているわけでもないが、実際の、具体的な「発話状況」の中で「発話行為」としてみると、初めて本来の「指示機能」をもつことがわかった。一人称は、話者自身を指示するとともに、話者の視点を確立する。二人称は、発話が向けられている応答者を指示する。更に日本語の場合は、英語にはみることのできないような、公・私にわたる「人間関係」をも指示することを知った。単独では「空疎」な人稱代名詞も、ひとたび個々の発話の中で「実現」される時、そしてその時にのみ「充足」される性格をもつ言語形式なのである。

5.0. 我々は当論文で、まず「記号」の性格を詳細に検討し、「意義」、「指示」、「実在」などを区別した。次に、ソシュールのラングの言語学は「記号」の内的・外的諸関係のみに限定されていて、言語の「指示機能」が無視されてしまっている事実を知った。後半では、この「指示機能」が、個々の実際の発話状況の中でのみ明瞭になるという事実を、日英両語の「人稱代名詞」について考察してみた。

日英両語の「人稱代名詞」といっても、まだその一部しか検討していない。また言語の指示機能は「人稱代名詞」だけにみられる現象でもない。形容詞、副詞、

言語の指示機能

テンス、アスペクト、ムードなどの「文法範ちゅう」も、それぞれ「指示機能」を担っている。⁽¹⁸⁾ それらはいずれも、「自己」、「人間関係」、「実在の世界」などを指示している。

重要な点は、これらの「指示機能」も、言語を「ラング」として、「記号」としてみるときは捨象され、無視されてしまう性格のものであって、「パロール」として、個々の具体的な「発話状況」の中で初めてその「本体」を現わすものである点である。その一例を「人称代名詞」について考察してみたわけである。

チョムスキーの「変形生成文法」も、根本的には「ラングの言語学」である。従って、具体的な「発話状況」の中でのみ「姿」を現わす様々な言語事象は切り捨てられ、不問に付せられてしまう。

我々は、「ラングの言語学」では見落されてしまう言語の重要な事実を、「パロールの言語学」の中で今後も発見していこう。

[注]

- (1) *Saussure* (1972), p. 157.
- (2) *Benveniste* (1971), pp. 43-48, "The Nature of the Linguistic Sign".
- (3) *Ibid.*, p. 46.
- (4) *Ibid.*, p. 45.
- (5) *Saussure, op. cit.*, p. 104.
- (6) *Frege* (1960), p. 59.
- (7) *Ibid.*, p. 61.
- (8) *Ibid.*, p. 63 の脚注。
- (9) *Ricoeur* (1977). ただし、当論文では、隠喩の指示機能・内容に触れる余裕はない。
- (10) *Saussure, op. cit.*, pp. 166-169.
- (11) *Ibid.*, p. 166.
- (12) *Ibid.*, p. 167.
- (13) *Ibid.*, p. 160.
- (14) *Benveniste, op. cit.*, pp. 217-222, "The Nature of Pronouns" および, pp. 223-230,

言語の指示機能

“Subjectivity in Language”の両論文から、多大な示唆を与えられたことを明記しておく。

- (15) 外林大作ほか編 (1978)。「概念」の項。
- (16) Benveniste, *op. cit.*, pp. 223-230, “Subjectivity in Language”は、哲学用語の「主体性」を用いているが、筆者は、言語学用語として定着しつつある「視点」ということばを用いたい。いずれにせよ、趣旨は同じである。
- (17) 日本語の人称代名詞の詳細は、『鈴木孝夫』(1973)を参照。
- (18) 「牧内勝」(1979)は、日本語の助動詞にみられる「方向」「視点」などの指示機能を検討している。(ただし、「指示」という用語は使用していない。)

参 考 文 献

1. Benveniste, Émile (1971): *Problems in General Linguistics*, trans. Mary Elizabeth Meek. Coral Gables, Florida, University of Miami Press (*Problèmes de linguistique générale*, Paris, Gallimard, 1966).
2. Frege, Gottlob (1960): “On Sense and Reference”, in P. T. Geach and M. Black, eds., *Philosophical Writings of Gottlob Frege*, Oxford, Basil Blackwell (“Über Sinn und Bedeutung”, *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik*, vol. 100, 1892).
3. Ricoeur, Paul (1977): *The Rule of Metaphor, Multi-disciplinary studies of the creation of meaning in language*, trans. Robert Czerny, Kathleen McLaughlin and John Costello, sj, Tronto, University of Tronto Press (*La métaphore vive*, Paris, Éditions du Seuil, 1975).
4. Saussure, Ferdinand de (1972): *Cours de linguistique générale*, ed. by Tullio de Mauro, Paris, Payot.
5. 鈴木孝夫 (1973): 『ことばと文化』, 岩波書店。
6. 外林大作ほか編 (1978): 『心理学辞典』, 誠信書房。
7. 牧内 勝 (1979): 「テンス, アスペクト および ムード; 「～てくる」と「～ていく」の文法」, 『フェリス女学院大学紀要』第14号。